

2018.7  
(公社)富山県薬剤師会  
広報誌

# とみ やく 富 薬

7号

第40巻  
No.348



ベニバナ *Carthamus tinctorius* L. (キク科 *Compositae*)

**生 薬**

コウカ（紅花） 開花後、管状花が黄色から橙色、鮮紅色に変わった頃摘み取り、風通しの良い日陰で乾燥する。花片が長く、色が鮮紅色で、質の柔軟なものが良品。

**成 分**

紅色色素：carthamin、黄色色素：safroryellow、フラボノイド：carthamidin、neocarthamin、種子からは、脂肪油：linoleic acid、oleic acid、ステロール類等。

**効 能**

婦人病、通経、鎮痛薬として一般の配合薬に配合される他、婦人薬とみなされる漢方処方に配合される。ベニバナ酒としても用いる。食用着色料、染料としても名高い。

生薬 コウカ

元富山県薬事研究所  
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

## 〇〇表紙について〇〇



古代エジプトのミイラを巻いている布帯は紅花で染められていることが分かっていますし、植物の断片がデル・エル・バハリ（神殿BC2040）で発見された墓の中に見出されています。インドでは紅花をサンスクリット語でクスムブーア (cusumbha) やカマロットーラ (kamalottara) と呼んでいること、また属学名の *Carthamus* はアラビア語の qartam (染める) に由来すると言われていることなどから原産地はインドやエジプト、アラビアと推測されています。ギリシアではディオスコリデス (40-90) の『薬物誌』に「クニクス (Cnicus)」の名で記され「この花は肉料理に添えて使われる。種子をつぶして、ハチミツ水あるいはトリ肉スープとともに搾汁したものは下剤になるが、胃によくない」と花と種子の用い方が記されています。

日本への伝来も早く、奈良県の「藤の木古墳」の石棺の中から紅花の花粉と顔料らしいものが見つかっていることから、6世紀には伝来していたものと考えられています。『万葉集』（7世紀後半から8世紀後半）には「くれなゐ」（紅）とか「すゑつむはな」（末摘花）として29首が詠まれ、『古今和歌集』（905）の雑躰俳諧歌や鎌倉時代初期の『新古今和歌集』にも詠まれ、詩の材料として親しまれていたものと思われます。『源氏物語』（平安中期）の六段「末摘花」や『枕草子』（平安中期）の四三段にも記載があります。俳句の世界では『奥の細道』（1702）の中に「眉掃きを佛にして紅粉の花」と詠まれ、奥州出羽の最上川流域の尾花沢の豪商で、紅花を商っていた門人の清風宅に逗留しているときに詠んだものと言われています。最上川流域は気候風土がペニバナ栽培に適していたようで享保年間（1716-36）には国内産の約4割、415駄（49.8t）を生産していました。

『本草和名』（918）には「和名 久礼乃阿為」、『和名抄』（931-37）には「紅藍 久禮乃阿井 呉藍」とあり、「呉藍」は中国、呉の国の藍の意で、後に紅に変化したものと考えられ、中国から伝わった染料であることが伺えます。『延喜式』（927）の縫殿寮、雑染用度には「韓紅花綾一疋、紅花六十斤」と記され、濃紅色の「韓紅」は12回も染めを繰り返すそうです。また主計寮上には諸国貢調として伊賀国、紅花7斤8両をはじめとして23カ国から献納され、栽培されていたことも分かっています。

江戸時代に入ると『農業全書』（1697）には「紅花は是又三草（麻、藍、紅花）の一つにて、古来より作りて織物糸其の外絹布を染めて濃薄によりて品とし、世に用ひ大切の物なり」と記し、続いて土質や気候風土、施肥法や播種法、彩花法、紅餅の作り方など栽培から加工法まで詳しく記しています。さらに「苗の時間引てゆがき、葉にし食するに、其性よく味もよし」と野菜として食することも記されています。他に種子油や薬として記載も多くありますが、栽培の多くは染料の生産が目的でした。日本の紅花染めは摘み取った花から紅餅を作ることから始まります。収穫した花卉に水を加えよく踏み、黄汁 (safloryellow) を踏み出し、ざるに移してよく水洗いすることを数度繰り返し、よく黄汁を抜きます。そのまま日陰で寝かせて2、3日発酵させた後、臼で搗き、団子状に丸め、むしろを被せて踏み、煎餅状にして天日で乾燥したものが紅餅です。染色にはこの紅餅をぬるま湯に浸け、麻布などでよく絞って更に黄汁を抜き、灰汁 (アカザ *Chenopodium album* var. *centrorubrum* の灰) を加えた液に溶かします。次に梅酢などの酸で中和し、布を入れて染色する方法が江戸時代には完成していました。また、酸を加えて放置すると紅色色素 carthamin が沈殿します。これを原料として、江戸時代には日本の伝統的な口紅や頬紅を作りました。（村上守一 記）